東に降らず西に流れた"ヨナ"

肥後の國，煙吹く大阿蘇谷には大観峯・肥後萩岳・豐後萩岳・かぶと岳などの古阿蘇火山の中に五岳50の火口群が抱かれているが，阿蘇の山体をこしらえている地質は箱根山のように硬い熔岩からできている火山に比べると，その山体の容積の50%が火山灰でできている。残りの50%中30%は集塊岩で，いわゆる熔岩は20%，しかも眞の阿蘇熔岩と言われるものは，ほんの僅かで1%にも満たない。

こうした阿蘇の火山灰，いわゆる**ヨナ**あるいは**ウィナ**と称せられるものは，この火山の最大の特徴になつている。比較的古いヨナはセメント代用に用いられているが，新しいヨナは，毎年6カ月週期で訪れる噴火と，その季節々々の卓越風によつて年々運搬され，堆積し，すばらしい厚さになつて外輪山や中央火口丘を蔽うているが，それは雨によつて崩れ，さらに流されて毎年のように周辺の集落や道路や田畑を荒している。もともとこのヨナは，pH 4.6 程度で，降着後も長時日冷却しきらず，降雨に伴われると草木の葉に密着して，そのまま容易に落下しない。しかも硫酸・塩酸・塩化アンモニヤなどを含んでいるために，いわゆる**阿蘇火山病**の原因となり，人畜の歯牙・骨骼の発育障害となつているのみならず，牛馬の妊娠障害などを誘発するものとして敬遠されており，その実害も少くない。しかし平常はこのヨナは噴火によつて上空に吹き上げられてから，西北一西一西南の風に乘つて運ばれるので，火口から東南一東一東北の3方向に主として降灰する。したがつてその限られた地帶にのみ，ヨナの警戒地帶ができており，その外の所では，害を受ける公算は小さかつたのであるが，それでも中央火口丘では，ヨナの斜面に毎年数糎の速度で地隙が生長し，雨期には集落・田畑の受ける土砂流の洗礼が問題になつていたのである。しかるに今年の夏の豪雨は，こうして大阿蘇谷の中に積り積つていた大量のヨナを，白川沿いに立野の火口瀬を通じて西方に流出し，熊本市を襲つた。阿蘇中央火口丘群の南郷谷では山ひだのひだというひだは，いずれもが崩落また崩落，幾十・百という山崩れが複合合体し，そのあるものは尾根の天辺まで引きさらつている。その泥砂の量は市街地だけで2,400,000 m³。東に降るべきヨナが西に流されてあの惨害を生んだのであるが，阿蘇山としてみれば，降つた雨量に應じて崩されるべきものが当然に崩されたのだという感が深い。

要するに問題は，"**まさかそんなに雨が降るとは考えなかつたから**"ではなくて"**崩れ去るべき素質のあつたそのヨナそのものを，もつとわれわれの身近かなものとして考えろ。阿蘇の高い所ばかり仰いでいては駄目だぞ**"という警告をこだわりなく聞き入れることができるか否かと言うことである。

北國の雪ならとけて流れるに，これはまた厄介な240万 m³の泥害(熊本市内；熊本大學松本唯一博士提供)

地質ニュース 特集号　昭和28年9月25日印刷　昭和28年9月30日發行　編集と発行　工業技術院 地質調査所　印刷者 向喜久雄　印刷所 一ツ橋印刷株式會社